

## 新刊紹介

一一〇(六〇)

せる時、「礼」の問題とは別個の、その時々特有の事情が背景にあったことを指摘する。

岩井茂樹「清代の互市と『沈黙外交』」は、江戸幕府による日中貿易への「信牌」導入を清が一切の外交交渉を経ずに黙認したことに着目し、清の互市体制のもつ辺縁性を主張する。中砂明徳「荷蘭国の朝貢」は、一六六七年のオランダ使節団にまつわる詳細をアジュダ文書に拠って明らかにし、加えて朝貢と現実的外交交渉を対置させる從来の蘭・清関係理解に疑問を投ずる。

第一部と第三部で示された内容は、中国王朝の柔軟な、裏を返せば都合主義的な「外交」の実態であり、「冊封体制」論や「朝貢システム」論に拠る中国外交理解の一面性を剔抉するものとなっている。一方、第二部では、朝鮮における「三韓」の領域意識と反女真・清意識との関連（矢木毅）、事元期における高麗官人李齊賢の峨眉山行の政治的背景（金文京）、紅巾の乱と高麗の政局動向との関連（ティビッド・ロビンソン著、水越知訳）、朝鮮燕行使の情報収集の役割（伍躍）が論じられる。第四部では、清・英間の雲南方面の境域画定交渉に見られる

中國外交の近代的変容（箱田恵子）、YMC Aの帝国性と日本・中国の民族主義との対立（高嶋航）、東アジアにおける「近世」「近代」の区分問題（永井和）が論じられる。朝鮮・近代をめぐる諸問題を、本書の主意とどのように関係付けることができるのかが問われているものと察する。

(木村 拓)

『選ばれた民——ナショナル・アイデンティティ、宗教、歴史——』  
アントニー・D・スミス著／一條都子訳

青木書店 二〇〇七・二刊  
A5 四一〇頁 四八〇〇円

本書は、エスニシティとネイションの關係をめぐる歴史社会学の先駆者にして権威、アントニー・スミスの最新作である。原著

のなかった問題である。なお、具体的な分析範囲は、ユダヤ・キリスト教圏に限定されている。

第一章「ナショナリズムと宗教」では、ナショナリズムと宗教の関係を論じた、必ずしも多いとはいえない従来の研究が提出了した論点を整理し、かのジョージ・モッセが現代ドイツにおいて注目したような、

基本文献として、確固たる地位を占めている。

本書の目的は、ナショナル・アイデンティティが、なぜかくも情熱をもって、長く、そして強靭に持続しているのかという問いの解明に手がかりを与えることにある。しかしながら、筆者はその原因を提示しようとするのではなく、その持続性を支えるものとして「聖なるもの」すなわち「宗教」を想定し、それがナショナル・アイデンティティの形成にどのように関わってきたのかに焦点を絞り、議論を進める。宗教とナショナル・アイデンティティの関係は、一見ひとつ学問分野を形成するほどに研究者を抱えているように見えながら、その実、必ずしもこれまで掘り下げられること

は二〇〇三年にオックスフォード大学出版局から公刊されている。スミスの旧作の多くはすでに翻訳があり、ベネディクト・アンドーソンやアーネスト・ゲルナーの著作とともに、社会学的ナショナリズム研究の

「エスニックなシンボル」や「記憶、神話、価値、伝統、また、それらのテクストやモノとしての表現」を分析対象とすることを表明する。第二章「聖なる親交の紐帯としてのネイション」では、ネイションへの共同体を支える共同体、領土、歴史、運命という四つの文化的資源が、それぞれ重層しながら、のちのネイションの礎となる「聖なる土台」の形成をうながしたことを見通している。第三章「選ばれる」とことと神との契約」では、旧約聖書に見える、神によって選ばれた民という、ユダヤ・キリスト教思想において決定的な倫理的特徴を浮き彫りとし、本書の具体的な分析の出発点をなす。以上が「選ばれた民」という本書の主要モチーフに対する総論であるとするならば、第四章以降が各論にあたる。第四章「神と契約した民」と第五章「使命を帶びた民」では、神の意思により他の集団からは選別された「選ばれた民」という集団意識をもつ共同体の形成を論じる。第六章「神聖な故郷」では、前章で確認した共同体が、自らに属するものと考える領土に対する情熱をとりあげる。第七章「エスノヒ

ストリート黄金時代」と第八章「ナショナリズムと黄金時代」では、共同体がもつ歴史の中に見出すことのできる、そのネイションにとっての「黄金時代」の位置づけの意味を分析する。第九章「死者の栄光」では、共同体のために犠牲となつた人物を記念し記憶することで、その共同体の行く末に大きな影響を与えていたことを確認する。なお著者は、ナショナル・アイデンティティを、近代的イデオロギーの中で創造されたものとする極端な構築主義とは一線を画し、歴史的実体を有するとするある種の本質主義を堅持している点は理解しておくべきである。

本書に関する社会学的な位置づけは、自身が同じネイションの研究者でもある訳者による周到な後書きに言い尽くされている。「いまさらここで評者が屋上屋を架す必要はない。したがってここでは評者の専門であるヨーロッパ中世史学の観点から、興味深い点に関して付言したい。本書は、事例の多くを中世のネイション集団に求めている。ここ二十年ほどのあいだに中世史学、とりわけ初期中世史学で蓄積されたネイション

研究の厚みは相当なものとなつておらず、著者スミスも、パトリック・ギアリによるフランク、コレット・ボーヌによるフランス、ジョン・ギリンガムやパトリック・ウォーマルドによるイングランドに関する個別研究を引き合いに出すこと忘れてはいない。しかしその一方で、今述べたヨーロッパ文明の中核的事例だけではなく、従来のヨーロッパ史という枠組みでは、ほとんど意識されることがなかつたネイション集団を、アのアルメニア王国、アフリカのエチオピア王国、イスラム教の諸国、中世ロシア、ブリテン諸島のスコットランドやウェールズである。いずれもキリスト教国でありながら、わが国においては研究者の口の端に上がることが極端に少ない。とりわけアルメニア王国やエチオピア王国のような孤立的キリスト教国の諸相は、資料等の問題もあって実証研究は難しいことが予想されるが、中世ヨーロッパ文明の本質的要件のひとつをキリスト教と捉える向きに対しては、その地理的枠組みと時間的変遷を問い合わせなおす

## 新刊紹介

一一一(六〇一)

試金石となるのではないだろうか。「中核」ではなく「辺境」で何が起こり、そして「中核」はそれのように反応したのか。もちろん本書の関心はそこにあるわけではないが、ヨーロッパ文明とキリスト教との関係を考える上で、きわめて示唆的な事例であることは確かである。(小澤 実)

上智大学中世思想研究所編

『中世と近世のあいだ——14世紀におけるスコラ学と神秘思想——』  
(中世研究 12)

知泉書館 二〇〇七・六刊  
A5 五七四頁 九〇〇〇円

この大部の論文集は、タイトルの示すところ、中世（一二世紀の安定したスコラ学）から近世（宗教改革期以降の新しい靈性、あるいはデカルト以降の哲学、ケプラーらに代表される自然科学の展開など）への移行期・転換期として一四世紀を捉え、その学問および思想を同時代的文脈と後代への影響の双方を踏まえて展望しようとする試みである。

第二部では、最初に加藤雅人論文が一四

世紀末から一二世紀初頭のスコラ学者ガントリヒ（K・リーゼンフーバー論文）が論じられる。そして第一部の中心を占めるのは、オットー（O・ヘンリクスとフォンテーヌのゴドフロワ）二つの極として第一部「宗教・神秘思想」と第二部「スコラ学・自然学思想」とが設定されている。第一部ではまず、新しい知識・宗教的枠組みを求める独特の思想家として、当時の学問的世界に收まらない人々に向けて倫理的・詩的哲学を構想したダンテ（岩倉具忠論文）、異教徒との対話の中でキリスト教教義の合理的な証明を模索したルルス（R・ロペス・シロニス論文）、アリストテレスとアウグスティヌスの知性理解を融合させながら、人間知性が神を直観する可能性を定式化したフライベルクのディートリヒ（K・リーゼンフーバー論文）が論じられる。そして第一部の中心を占めるのは、オットー（O・ヘンリクスとフォンテーヌのゴドフロワ）の新しい個人的・内面的な宗教的潮流としてのドイツ神秘主義であり、マイスター・エックハルト（田島照久論文）、ハインリヒ・ゾイゼ（神谷完論文）、ザクセンのルドルフス（須沢かおり論文）、リュースブルク（植田兼義論文）の四人の神秘家が扱われている。

第二部では、最初に加藤雅人論文が一四世紀末から一二世紀初頭のスコラ学者ガントリヒ（K・リーゼンフーバー論文）が論じられる。そして、城戸毅「ジョン・ウイクリフの思想」がある。練達の中世史家の手になるだけあって、当時の政治的・社会的状況を概観した上で、ウイクリフ個人の経験の内にその思想を位置づけるという歴史的態度は

収録された論文は一八に及ぶが、大きく二つの極として第一部「宗教・神秘思想」と第二部「スコラ学・自然学思想」とが設定されている。第一部ではまず、新しい知識・宗教的枠組みを求める独特の思想家として、当時の学問的世界に收まらない人々に向けて倫理的・詩的哲学を構想したダンテ（岩倉具忠論文）、異教徒との対話の中でキリスト教教義の合理的な証明を模索したルルス（R・ロペス・シロニス論文）、アリストテレスとアウグスティヌスの知性理解を融合させながら、人間知性が神を直観する可能性を定式化したフライベルクのディートリヒ（K・リーゼンフーバー論文）が論じられる。そして第一部の中心を占めるのは、オットー（O・ヘンリクスとフォンテーヌのゴドフロワ）の新しい個人的・内面的な宗教的潮流としてのドイツ神秘主義であり、マイスター・エックハルト（田島照久論文）、ハインリヒ・ゾイゼ（神谷完論文）、ザクセンのルドルフス（須沢かおり論文）、リュースブルク（植田兼義論文）の四人の神秘家が扱われている。

さらに、歴史家にとって注目すべき論文として、城戸毅「ジョン・ウイクリフの思想」がある。練達の中世史家の手になるだけあって、当時の政治的・社会的状況を概観した上で、ウイクリフ個人の経験の内にその思想を位置づけるという歴史的態度は